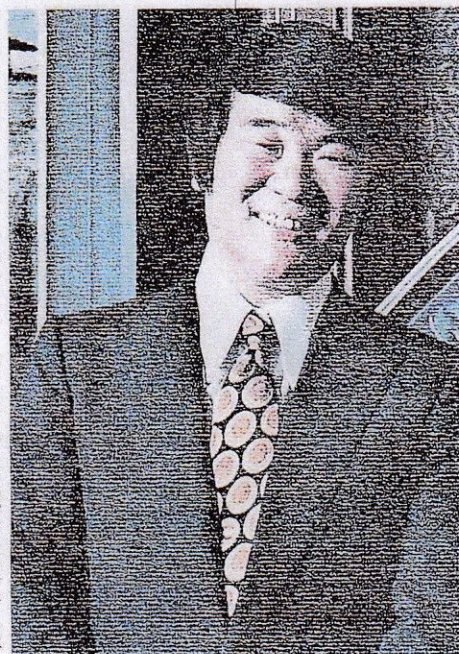


## わが心の自叙伝

菅原洋一

▷20

「ハンバーグ」とあだ名が付けられた頃の筆者



のイメージが定着した。娘の歌織もCMからドラマ、レコードまで発売するようになっていった。

本職の歌のほうは1975（昭和50）年には「愛の嵐」がヒットして、続く「乳母車」で「東京音楽祭」歌唱賞を受けた。

さらに80年にリリースした韓国の作品「1990年」は、父親が娘の幸せを祈る作品でこれもおかげさまでヒットした。だが私は心の中で、本当に歌いたい歌を見つけた！と考えるようになっていた。「家庭的なパパ」のイメージを壊すことも視野に入れなければならぬのではないのか？

そんなこの年の暮れ、私はずっと出演し続けていた「紅白歌合戦」を辞退しようと考えていた。出場者発表前に私のコメントが新聞や雑誌をにぎわせていた。

（すがわら・よういち「歌手」）

「忘れな草をあなたに」が大ヒットして「紅白」で歌った年、私はNHKの「歌のグラウンド・ステージ」の司会役に引っぱり出された。由紀さおりさんとの「細目コント」などといわれ好評だったが、元来私はおしゃべりが得意なほうではないから、ボケ役に徹した。

もうひとりレギュラーとして出たのが「ハマクラ先生」こと作詞作曲家の浜口庫之助さん。番組で「今月の歌」のような形で新作を発表した中で、先生から「菅原君に合う歌をかけたよ」と言われて手渡されたのが「恋の町札幌」である。「忘れな草」がヒットし始めていた時期だったため、次のシングルにしようと思っていたが、その間をぬって石原裕次郎さんがレコーディングし、大ヒットした。当時はちょっと悔しかったが、今にして思えば「あ

## ニックネーム

これは裕次郎さんだったから売れたのかもしれないと思うようになった。歌の運命は面白いもので、現に「忘れな草をあなたに」も「愛のフィナーレ」も私のために作られた歌ではなかったが、私の声で売れた。それを考えると納得だ。

当時各局で歌番組が放送されていたが、月曜日の夜にはフジテレビの「夜のヒットスタジオ」が生放送されていた。そこで司会の前田武彦さんが私の顔を見て付けたニックネームが「3日前のハンバーグ」である。

ハンバーグは好物だったから、結構気に入っていたが、それからというもの、街を歩いて

いても「ああハンバーグだ」と言われるようになった。レストランでハンバーグを注文したら、お店の人に「ほんとにお好きなんですね」と言われたり、隣に座っていた客が「ハンバーグ」と言いかけ、たまたま隣に私がいることに気がきます。そうに失礼しましたと慌てて、ほかのものに注文を変えてしまったりすることもしばしばあった。最初は戸惑ったものだが、子どももお年寄りにも好まれる

と、すっかり「家庭的なパパ」

さて家庭的で皆に愛されるハンバーグのせいかな、それからは娘とのコマードシヤルの出演依頼がきたり、ドラマ出演やクイズ番組のレギュラーの話が来たりと、すっかり「家庭的なパパ」

## 「ハンバーグ」に愛着が湧く